

特276
532

松
州



シキパン・ウー・イスタレユーロ



始



杭州四景



墳王岳



三潭印月
8.2.-2



湖濱公園

292.2



大和塔



雲林寺



孤山



拱宸橋



日本領事館

概説

杭州特別市は海杭線(舊滬杭甬鐵路)の重要驛で又支那を南北に縦断する大運河の南端に當り、浙江省政府の所在地である。此所は國際的にも上海、蘇州と併び稱せられ、馬關條約(明治二十八年)以來、沙市や蘇州と共に開港場となつた。市は城内と城外(俗に湖墅と稱ぶ)に分れ鐵路・水路・自動車路・航空路共に至便で浙江省首府として近代の都市の面貌を備へて居る。茶生絲、繭等の外、絹布・緞子等の絹織物を産出し商工業も頗る盛んで政治、經濟的にも中國主要の都市として重視せられて居るが、古來名勝・舊蹟地として有名で「上有天堂、下有蘇杭」と其の美景を嘆賞され、宗教的にも知られ又元朝の初渡來した旅行家マルコポーロをして「地域の景勝、宮殿、樓閣の壯觀世界に冠たり」と絶讃せしめたのも此によるのである。

今次事變發生するや、我が無敵兵團は、昭和十二年十一月五日曉の闇を衝いて突如、杭州灣の高潮洗ふ金山衛附近に有史以來の敵前上陸を敢行し、爾來破竹の勢を以て鐵壁の敵陣を粉碎して驚異的進攻を續け、同年十一月十日には上海の攻圍を完成、續いて南京の攻略に参加するや直に踵を返して杭州に迫り、十二月二十五日には皇軍堂々の杭州城の入城が行はれたのであつた。翌昭和十三年が明けるや杭州市には自治委員會が成立し、同年六月には省政府及市政府の成立があり、治安民業の恢復諸政の整備等に努めた結果避難者の復歸は逐日増加し諸店舗は競つて開店し市況は新しき指導の下に驚異的な復興を見つゝある、此の間の事柄は火野葦平の幾つかの作品により知られて居る。曾て、西湖畔の名勝舊蹟等は倭寇の亂とか、長髮賊の亂等により屢々戦火を蒙つたのであるが、一度皇軍此の地を到るや

其の周到なる配慮と保護により貴重なる幾多の風物や資料は掠奪、破壊等の災難より免かれ、昔ながらの詩を傳えて居る。

沿革

杭州は四千年來の古都で所謂彼の「揚州の城」といふのは今日の杭州府に屬する地域であるといはれる。今、市の沿革を述べると禹貢には禹貢又は余杭、春秋時代には越に屬し、秦漢及び、唐代には錢塘といひ、宋代に臨安といひ、元に之を杭州治と改め、明清時代に杭州府を置き民國に至つて杭州市と改稱した。

古來、首都であつたのは五代と南宋の一朝で五代の吳越王錢鏐は中世杭州の建設に偉大な貢獻をした。宋室の杭州遷都により杭州は經濟、文化の方面では世界一と稱せられ、以來元朝から清朝に到るまで杭州は良く其の固有の繁榮を誇り得たが、其の間明末の寇亂と清末の長髮賊の亂には名のある人物は殆ど災害を蒙り去つたといはれる。民國に入り、思想一變し、歐米文化の輸入は民國十五年市の改名以來、舊來の施設を改革し、此の都市をして近代的文化都市の水準まで揚棄せしむるにいたつた。

地勢

杭州は西に西湖を控え、其の西南に諸峰を擁し、東面は平地で錢塘江岸に連り、北方も同様平地でクリークや運河縱横に通ずる沃野となつて居る。城西の諸峰は概ね石灰質の岩山で、最高三百米許り、水流は總て西湖に注ぎ、西湖満水すれば城の周圍の河川に排出する。市の東方は比較的に低地であるため古來幾度か錢塘の水害に甚大な影響を受けたが、その

後治水の工作が行はれた結果此の方面の沃野は屈指の農産地帯となり中原の寶庫とさへ言はれるようになった。北方は同様平野で江蘇省に連り往者より運河拓け商業貿易交通に便して居るのは有名である。

氣候

當地方の氣候は概して良好で四季の變化も烈しくなく日本人の居住にも適して居るといはれてゐる。地理的に緯度の上からは内地よりも南方に位し、全體に溫暖で、旅行者渴仰所謂「江南の春」は毎年一定してはゐないが三月から四月中旬頃で直ぐ初夏の候となる。六月より九月迄を夏と云ふ可く、高温にして降雨も又多い。温度は上海に比較して平均六、七度高く、百度以上に達するのは夏の七月中旬頃である。秋は十月より十二月までと云ふ可く、比較的長期で雨量も少く空氣も爽快で春に次ぐ旅行のシーズンといはれる。冬期は一月より三月頃迄、最低氣温は一月中旬頃で稀に降雪をみる事があるが、大體華氏の四〇度前後で格別寒い感じもなく旅行には些程困難ではない。要之、一年中春と冬が短く夏と秋が長く全體に溫暖である。

人口

事變前は正確な數字ではないが約六十萬人と呼ばれてゐたが、事變により各地に避難して殘留の市民は約五分の一に減じ、皇軍入城以後日支軍官の努力で治安市政の恢復をみ、復歸者も逐日増加しつつあり、現在約三十五萬人といはれ近き將來交通の恢復と相俟つて却つて事變前よりも多くなるだらうといはれてゐる。邦人居留者は馬關條約締結の當初約四百

名を數へたといはれるが、其の後種々の事由で減少し事變前には僅かに城外拱宸橋の專管居留地に一、二軒を數えるのみで寂寥たるものであつた。併し皇軍入城と同時に逸早く邦人の活動となり驚異的に増加し、現在總數一、一〇〇名(昭和十四年五月末現在)を數へ、民會及小學校も出現し、今後は膨張の一途を辿るであらう。
在留歐米人は英佛米人其の他で約四十名を算し宗教醫療に従事して居る。

四

市 街

杭州は西と南に秀峰を負ひ西湖に面し東は錢塘江に臨み遠く杭州灣に至り、北はクリークや運河の錯綜する肥沃な平野となつて遠く江蘇平野に通る。其の形状は南北に長く東西に狭く一種の馬蹄形をしてゐる。其の境界は東は錢塘江を隔て、蕭山に對し、東北は江に沿ひ海寧に至り、西北は運河ありて直に德清に通じ、西は餘杭に達し北は崇徳に境し、南は富陽に接してゐる。如上の各路は凡て舟車の交通至便である。

市街は湖東の城内と其の北方にある運河を挟む一帯の平地に出來た城外都市(俗に湖墅といふ)より出來てゐる。

◇府 城◇ 府城は即ち城内で南北に廣く、東西に狭い不整形の碑壁を繞らして居る。唐朝以前は武林門以北より靈隱に到る小高い丘陵地が市の中心を爲して居たといはれ、五代に吳越王錢鏐の江水の治水完成により始めて市街の中心は東南地區の現在の場所に移轉するに至つた。當時の府城の周圍三十支里といはれ、其の後南宋に至り高宗此の地に遷都するや舊址により築城し、其の周圍七十餘支里といふ。明朝兩代に城壁は改修の上縮小せられ周圍三十六支里の城となり

十箇所の城門を設けられた。即ち東面して候潮・望江・清泰及び慶春の四城門、西湖に臨んで清波・湧金・錢塘及び武林の四城門あり、南面に鳳山門、北面に良山門の十城門である。右城門中、錢塘・湧金・武林・良山・慶春及び鳳山門の六城門は西湖・運河に通じ水門となり舟行が出來た。

現在は城壁は残つて居るが城門は良山、武林の二門を残して居るのみである。民國以來は武林門より湧金門にいたる城西一帯の城壁を撤去して同地帯を開拓して新市街を創設し道路を修築して逐年市井の刷新に盡力したので舊來の面目は一新し、見違えるやうな市狀となつた。新市街は道路平坦で幅廣く大廈高樓軒を連ね、諸官衙・銀行商店・劇場・旅館・茶館・菜館其の他櫛比し就中延齡・仁和・迎紫・新民・湖濱等の諸街路は殊に殷盛を極めて居る。

◇城 外(湖墅)◇ 湖墅は府城武林門の北方約八軒、有名な大運河の南端にあたる。此處は馬關條約により開港した貿易場で、水路により嘉興・湖州及び上海等に通じ大小の船舶の航行自由で、又鐵路は良山門より六軒の支線を通じ自動車道路完備し水陸の交通至便である。附近は諸物産の集散地で、工場も多く商業も盛んで、拱宸橋附近の大馬路・裏馬路に翹集した大小の商舖・茶館・菜館は頗る多く、曾ては紅燈の觀樂場として遊士の粹遊で有名であつた。我が專管居留地は拱宸橋の東北方にあたり明治二十九年締結の取極書により租借せられたもので總面積七一八畝あり、今日は廣袤たる草地に縱横の道路のみを残して居る。

産 業

杭州は古來、山紫水明にして地味肥沃、農産物も種々な物を出し他の追隨を許さぬものがあつた。先づ對外的に貿易品

五

として農産の大宗を爲すものに茶業がある。水産、土産として西湖の菱藕があり、地方的なものに湖中の蔬菜、西溪の筍、六和塔江邊の餅、塘棲の甘蔗等の産物がある。併し近代的産業に至つては其の繁榮を上海に奪はれ、製絲、絹織、紡績等が知られて居るに過ぎない。

◇茶業 ◇ 茶業は養蠶業と同様に浙江省の大産業の一で、同省の産物は湖州茶、平水茶、温州茶等の名で稱ばれ、其中最も優秀なものが現在、湖州茶の中に含まれて稱ばれる龍井茶である。龍井茶は西湖の西方の山岳地一帯即ち獅子峰、雲棲、虎跑等の産茶で殆ど同様の品質を爲しこれらを總稱して龍井茶といひ、一般中國人は勿論、外國にまで有名である。

事變前の統計によれば市内一〇、一八七戸商家の中、茶店業五八四戸、茶箱業二四戸、茶葉業一〇五戸を算し頗る振つて居たが、事變に因り閉鎖し今日では茶店業二四七戸、茶葉業三〇戸を數へてゐる。併し將來復活するものと見られる。

西湖の菱藕は昔は運根で製造したものであるが、其の後菱の澱粉を以て造ることが盛となり今日では中國料理必須の農産物となつてゐる、西湖の蔬菜は三潭印月に産するもので、太湖や蕭山湘湖で出すものより風味が佳く其の名は古くより有名である。

◇蠶業 ◇ 製茶業に比較して勝るとも劣らないものに斯業がある。共に浙江省の農産業の大宗たるもので、養蠶業は起源が古く、黃帝の時代に始めたものといはれるから支那開闢以來の産業といへる。全省到る處、桑園を見ざるなく品質に於て日本品には幾分劣るが産額は多く、更らにこれに伴つて製絲、製布等の工業も殷盛を極め一大特色をなしてゐる。

◇製絲業 ◇ 養蠶業の盛なるは既述の通りであるが、杭州市に於ては斯業全省の産品を此處に集中するため必然的に

製絲業の殷盛を誘致して居る。斯業に土法と機器法があり、土法は原始的手法による所謂手工業で、機器法は即ち近代資本を利用する科學的製絲法である。事變前の統計に依れば此等の工場約十六戸を算して盛んであつたが、事變に因り閉鎖し、現在邦人の手により恢復をみてゐるものも二、三戸あり、動力の復興を俟ては又充分な繁盛を見るであらう。

◇絹織物業 ◇ 市内工業の大宗は即ち絹織物業である。製茶業、製絲業に較べて高度の技術と資本を要する斯業は支那随一といふべく、昔宮廷に於ては織物大臣を派遣して宮廷用の製品には特に監督をなさしめてゐた位で、品質良く、耐久力があり且精巧であるなどの特色があり輸出品として有名であつた。製布業（絹物の）には鐵機織、木機織及び電器織との三方法があるが、紗布には春紗・官紗及び縞紗の三種あり、紡織に杭紡・板紡及び羅紡の三種があり、産品として我國に於ても珍重せられて居るものが多い。事變前の統計では繭糸業四九戸、人造絲業四〇戸、經緯業二九戸、綢業二二二戸、絲織物業一五五戸を數へ盛大であつた。

事變で全部閉鎖し、目下蠶糸業一戸、綢廠八戸、綢布業二六戸恢復するに至つたが、工業の原動力である電力が復活するに至れば素晴らしい發展を呈するものと見られる。

◇紡績業 ◇ 絹織物業に比較すれば劣るが近年素晴らしい發展を遂げて來たものである。原料たる棉花は沿線、上海、北支及び海外より移輸入してゐるが、近代式機械を使用して、綿絲綿布其の他に偉大な勢力を占めつゝあつたのである。統計によれば綿織物業三四戸、布業五八戸を算へ、事變により一時閉鎖はしたものゝ恢復してゐるもの一〇戸（綿織物）布業四戸を算へ一部邦人の經營になるものもある。

斯業も外の工業と同様電氣動力の不足で當分足踏みの低調であるが、電力問題も遠からず解決がつくものと思はれるから其の節は活潑な動きを見せるであらう。

金融

浙江省の首府として將又前の國民政府財閥の一大地盤としての杭州は政治・經濟方面に於て確固たる地位を占めてゐた。従つて杭州に設けられた幾多の機關は中國に於ける代表的なものばかりで、資本主義財閥の格好の温床地でもあつた。統計によれば銀行業二〇、錢兌業三七、儲蓄業一、證券業一、質屋業一四、保險業五七を數へて一大金融市場を現出してゐたが、事變の結果これらは全部退却し、今日では過渡期ではあり、機關としては正式に成立してゐるものは皆無といふ有様である。僅かに駐屯部隊附屬正金銀行出張所に於て軍票に依る銀行業務（爲替業務を含まず）を行つて居るに過ぎない。過渡期段階の杭州市内には、日本圓票・同補助貨・日本金票・及び中國四行法幣（中國・交通・中央・農民の四銀行）及補助貨が流通し、其の流通額は判明しないが、錢莊（兩替屋）が無く、相場は上海市場に準じ日本圓票又は軍票の相場が高く取扱はれて居る。將來は最近設立された華商興業銀行券が之等に代つて流通を見るに至るものと見られる。

現在日本軍駐屯部隊に於ては一般中國民衆が法幣下落による損害と日本品購買に於ける不便を除く目的を以て三月一日より預濟正金銀行杭州出張所をして法幣、軍票の交換を引受けしめ、大丸及實業百貨店をして軍票による日用雜貨の低廉なる物資交換所の經營を爲さしめ一般中國民衆の經濟生活に寄與して居る。

交通

杭州は海杭線の最大驛で市内に屬する小驛でも六ヶ所を算へ、海杭線により上海へ、蘇嘉線により蘇州・南京へと通じ、又大運河により湖州・嘉興・蘇州及び上海方面に通じ、長途バスで浙江省各驛への交通網開け殆ど通ぜざるなく、また空路上海・南京に通じ、浙江省交通は勿論中支那交通の要點をなしてゐた。近年航空、バス公路の建設熱頗る旺盛となり、昔は舟楫による外方法無き山奥も近代的息吹きに甦生したのであつた。事變によりこれら交通は一部鐵路の交通を除く外殆ど杜絶したが近き將來、倍舊の發展を遂げるものと豫想せられて居る。

市内交通

一、人力車（黄包車）

人力車は市民の脚として市中に氾濫し、安價で輕便、其の數は現在二千五百輛といはれる（料金時間乘三〇仙平均）

二、タクシー

(イ) 實業百貨店タクシー部 電話一四八四番

料金市内一回 一圓五十錢 時間貸五圓

視察湖畔一周 十五圓

(ロ) 日本人旅館自家利用の場合左記の料金をとつて居る。

料金 市内一回一圓五十錢 時間貸 五圓

三、バス

事變により一時杜絶した市内外バス網は昭和十三年十一月華中都市自動車會社の設立を見、また昭和十四年六月一日より華中鐵道會社の自動車區開設され、舊に復し、現在の兩社運轉系路は左の通りである。

1、華中都市自動車路線

※華中都市自動車杭州營業所 上西大街、五坊七七 電話一二六一番

(イ) 杭州驛——特務機關前(全長四・一杆) 一日十六回往復

徑路 杭州驛——焦棋杆——官巷口——延齡路——特務機關前 所要十五分 料金各區四仙

(ロ) 迎紫路——拱宸橋線(全長一〇杆) 一日二臺 十一往復

徑路 迎紫路——延齡路——武林門——三官街——觀音橋——小河——拱宸橋、所要二十五分

(ハ) 迎紫路——靈隱線(全長七杆) 一日十一往復

徑路 迎紫路——延齡路——昭慶寺前——中山公園——岳王廟——洪春橋——靈隱、所要二十五分

2、華中鐵道自動車路線

イ 杭州——餘杭線(延長三〇杆) 一日二往復

往路 杭州——實業百貨店前——松木堤——老頭山嶽——留下鎮——閑林埠——餘杭(所要五十分)

四、内河民船

江浙の沃土は縦横にクリクや運河が馳驅して古來交通經濟上幾多の貢獻をなしたもので、城外の拱宸橋附近(俗に湖墅と言ふ)は秦始皇創設の大運河の南端に當り此所を中心として各方面に内河船の交通が頻繁に行はれ中支那經濟交通上主要な役割を果しつゝあつた。近年鐵道とバス交通の擡頭に因り其の勢振はざる憾はあつたが、今後其の奥地交通に於ける役割は益々擴大せられるであらう。

事變前は湖墅を中心として内燃機關裝備のモーター船二十餘隻が就航し、帆船や舢に屬するものは大小數千に上つてゐたが事變後は皇軍占據の平和地域内に民船の就航を試みるものあり現在左の通りの運航が行はれてゐる。

※内河輪船公司 迎紫路二七 電話一三六四

(イ) 拱宸橋——塘棲線(全長四五支里) 一日二往復

徑路 拱宸橋——王家莊——五林頭——塘棲 所要三〇分

(ロ) 拱宸橋——德清線(全長七五支里) 一日一往復

徑路 拱宸橋——王家莊——五林頭——德清 所要三時間

(ハ) 拱宸橋——餘杭線(全長五〇支里) 一日二往復

徑路 拱宸橋——三墩鎮——餘杭 所要二時間

通信

◇郵政局◇ 事變前には管理局一、郵政支局七、郵件検査所一合計九箇所の郵政機關があつたが事變により閉鎖し、軍

用以外のものはずつと其の儘になつてゐたところ昨年八月より管理局及び官巷口、忠清街の二支局が郵務の一部を再開するに及び逐次市内各所の支局も再開するに至つた。書留、普通、至急、航空、小包及び送金等の事務を取扱つてゐる。

※管理局（寶清路）支局（官巷口、忠清街、湖駁、拱宸橋）

◇電報局◇ 事變前には交通部無電臺一、交通部電報局一合計二箇所の機關があつたが郵政局と同様事變により閉鎖した。昨年四月より上海國際電臺の手により復活、華中電氣通信株式會社杭州電報局として成立一般の需要に應じて居る。昨秋より電報略號の登記及電話託送の取扱も行ひ、中國々内は勿論世界各國に結び、日華歐文の電報も亦可能である。

※電報局（龍游路八號 電話一〇一〇番） 同出張所（延齡路一二〇號 電話一〇一二番）

◇電話局◇ 事變前は政府より獨立して浙江省全省に跨る電話網をもつた電話局があつたが事變により閉鎖し、昭和十三年八月華中電氣通信會社の手により補修一部通話の恢復を見、昭和十四年五月には上海、蘇州、吳江、無錫、鎮江、南京等の中支主要都市との間に長距離通話が開始された。

※杭州電話局（惠典路二三號 電話一〇〇〇番）

◇放送局◇ ラヂオ放送局（廣播電臺）は事變前四を算したが事變により全部閉鎖し、目下設立準備中である。

主要機關會社團體

日本側

官 領事館、同警察署

會社團體

日本人居留民會、同小學校、大和俱樂部、在郷軍人分會、日本婦人會、杭州電話局、同電報局、華中水電、華中蠶絲、華中鐵道日本通運、華中都市自動車、大丸洋行、日鐵出張所、上海内河汽船、三友實業、維新工業、同仁會病院、實業百貨店、其他

新聞

朝日新聞、大毎東日、同費通信 上海毎日、新申報

活動館

東和劇場、西湖影戲院

旅館

新々旅館（裏西湖驛より六軒 宿泊料六圓以上）
常岡ホテル（英士街） 三軒二 五圓以上）
九洲旅館（東坡路） 三軒三 三圓五〇以上）
旭ホテル（英士街） 三軒 四圓以上）

料亭

蓬萊館（仁和路）松濤閣（白傳路）君不去（清波門直街）

觀光

ジャパン・ツーリスト・ビュロー（杭州案内所）（杭州、新民路三五五）〔電話〕一二六三番
同杭州驛内出張所

中國側

維新政府

郵政管理局、同支局、高等法院、地方法院、第一監獄

省政府

秘書處、教育廳、民政廳、警務處、財政廳、建設廳、警察局、鹽務管理局、印花菸酒稅處、省區救濟院、塘江水水利局、杭州區稅務分局、茶葉登記檢驗所

縣政府 杭縣公署
市政府 社會局、財政局、工務局

蠶絲改進委員會、市立中學校、直轄輸出入貨物經理所、綢業市場、杭州監獄、市商會、西湖警察署、大民會聯合支部

郵政管理局、同支局、市政府診療所、傳染病院、市立病院

會社團體 杭州電氣公司、英興洋行、日華佛教協會、市商會、大民會支部

新聞 杭州新報、中聯社支局

劇場 大世界、百貨商場、市東商場

旅館 湖宮旅館(迎紫路驛より二軒三 宿泊料四角以上)
興華公寓(延齡路 二軒五 一元六角以上)

新泰旅館(延齡路 二軒六 七角以上)

大陸旅館(延齡路 二軒六 四角以上)

大同旅館(延齡路 二軒八 五角以上)

中央旅館(延齡路 三軒 九角以上)

聖湖旅館(仁和路 二軒七 四角以上)

湖邊旅館(仁和路 二軒七 三角以上)

大亞旅館(吳山路 二軒八 三角以上)

聚英旅館(教仁路 二軒九宿泊料一元八角以上)

神州旅館(吳山路 二軒八 二角以上)

新泰第二旅館(吳山路 二軒七 八角以上)

永安第二旅館(吳山路 二軒五 一角以上)

永安第一旅館(吳山路 二軒五 二角以上)

寧紹旅館(吳山路 二軒五 二角以上)

中南客棧(教仁路 二軒 二角以上)

環湖旅館(湖濱路 三軒一 八角以上)

滄洲旅館(英士街 三軒五 七角以上)

東新客棧(編綠路 驛前 三軒以上)

同安旅館(更生路 二軒以上)

全安旅館(更生路 二軒以上)

茶館 雅園、喜雨臺、宴賓園、西園
酒菜館 聚豐園、大和園、高長興、天香樓、大達公司、新興館、素香齋、三義樓、晚翠軒、鴻興館、多益處、天真、其他

西湖遊覽案内

杭州は小瑞西といはれ景勝は支那隨一で天下に轟いて居るが、獨り景観のみならず宗教政治文化の香り高い古都で湖畔の楊柳の蔭には歴史的に數多い遺蹟があり、一度湖畔に杖を運べば自ら興趣の湧くのを覚えるであらう。唐代の白居易、蘇軾五代の錢鏐、宋代の林和靖、岳飛、元代來朝のマルコポーロ、清代の聖祖帝等の王侯、詩、武人及び旅行家等の直接間接の力も亦西湖の名を一段と高揚せしめるのに役立つたのである。

西湖は杭州府城の西にあり、古來、明聖湖、金牛湖、錢塘湖、上湖、名兩湖、放生湖、裏湖、後湖、西子湖、鎖金窟、郎官湖、西陵とも呼ばれ、支那全國三十一大湖中有名第一の湖である。湖の生成の起源は分明しないが、一説によれば昔は錢塘江の一部分であつたが、流土が東方に陸地を造り、西湖のみ山間のほとりに残留して湖となつたといはれる。湖は白沙堤と蘇東坡の築造したと傳へられる蘇堤と、蘇堤に通ずる金沙堤の三堤によつて外湖、北裏湖、岳湖、西裏湖及び南湖の五湖に分れて居る。周圍三十支里、三面翠峰を繞らし、楊柳湖畔を埋め碧水滾々として注ぎ四季ともに格別の趣がある。湖畔には西湖十景、錢塘八景等をはじめ、禪寺律寺の名刹、岳王、林和靖、錢鏐などの墓や廟祠等、其の他の古蹟に富み興亡幾千年の歴史を物語つて居る。

最近、交通機關の發達と共に來遊する觀光客や巡禮者は内外各地より踵を接し其の數は年數十萬に達するといはれる。來杭者は杭州驛より西方約三軒、人力車、自動車又はバスで數分乃至十數分で楊柳繁る湖畔に杖をとどめる事が出来るのである。

視察方法と徑路及び日程

湖畔遊覽には種々の方法がある。徒歩、人力車、自動車、バス或ひは遊艇、輻に依るなどで地勢・道路・距離・時間等の條件で充分其の目的を果たす爲めには如上の諸機關を適度に利用すればよい。自動車による驅け足の湖畔一周一時間のプランから小舟や輻による一、二週間、永きは一箇月に亘る趣味のプランも出来る。今簡單ではあるが觀光者の參考迄に、自動車、人力車、輻、遊艇による大體一、二日間のプランになるコースを記述すると

(一)自動車遊覽コース

杭州驛—三元坊—吳山—淨慈寺—六和塔—花港觀魚—蘇堤—岳王廟—清蓮寺—雲林寺(飛來峰)—上天竺—中山公園—平湖秋月—斷橋—湖濱公園—杭州驛。及び逆コース。自動車一時間五圓、バス一時間一〇圓(中型)

註、右は所要時間、四時間半より八時間迄のもので、更に短縮すれば淨慈寺—六和塔—花港觀魚—走行四〇分。岳王廟—清蓮寺往復二〇分、雲林寺門—上天竺往復二五分、見物所要約四〇分、合計二時間短縮可能となる。バスによるコースで、雲林寺—上天竺往復は走行不可能で注意を要する。

(二)人力車遊覽コース

杭州驛—湖濱公園—斷橋—平湖秋月—放鶴亭—中山公園—岳王廟—雲林寺(飛來峰)—上天竺—清蓮寺—蘇堤—花港觀魚—淨慈寺—三元坊—杭州驛、及び逆コース。人力車時間借平均三〇仙、

註、右は見物時間を出来るだけ節約しても六時間以上を要する。出來得れば六和塔行のコースを含めて二日のプラン

にするのが良い、馬車の無い常市では春先など自動車によるよりか却て快適である。

(三) 橋による遊覧コース

1、新民路—湖濱公園—斷橋—平湖秋月—放鶴亭—中山公園—岳王廟—飛來峰—雲林寺—清蓮寺—棲霞嶺—紫雲洞—保俶塔—湖濱公園—新民路、料金一日一人宛一元六角。

註、所要十二時間、輻は事變前は多く利用せられて居たが目下影を潜めて居る。右コースは西湖の西北部の諸景勝を巡訪する時代的コースで車馬で行けない山間を跋涉するものである。

2、新民路—柳浪聞鶯—錢王祠—雷峰塔址—淨慈寺—南高峰—烟霞洞—烟霞寺—龍井寺—理安寺—水樂洞—虎跑寺—湖濱公園。料金一日一人宛一元二角。

註、同じく一日がりのコース、前項に比較して西湖の南西方の諸峰に散在する景勝を探るものである。

(四) 遊艇による遊覧コース

1、湖濱公園—湖心亭—三潭印月—花港觀魚—高莊—蘇堤春曉—曲院風荷—岳王廟—西冷橋—放鶴亭—平湖秋月—中山公園—博覽會塔—湖濱公園、及び逆コース。所要六時間以上料金半日一元六角、一日二元五角

2、湖濱公園—柳浪聞鶯—錢王祠—雷峰塔址—淨慈寺—蔣莊—花港觀魚—高莊—劉莊—西冷橋—中山公園—博物館—平湖秋月—湖濱公園。所要時間及び料金前項と同じ、

尙遊艇には大型(畫舫二〇八乘)中型(一五人乘)小型(舫四人乘)の三種がある。

湖濱公園 驛西方三軒 見物所要十五分

西湖の東北岸、湖濱路に沿ひ南北約八百米突に互る細長い公園で南より北へ、第一公園より第六公園まであり、民國以來のものである。公園には花樹を植え坐椅を配し、附近一帯の盛り場に雲集する市民の休息、遊歩に充てゝ居る。園内には、北伐陣亡將士紀念塔、陳榮士銅像及び紀念塔の三がある。園内の櫻樹約一千本は邦人一有志により遙に内地より移植せられたものである。尙公園の西邊は湖水に接し南より北に五箇所の碼頭あり大小の遊艇集して客を呼び湖畔舟遊には頗る便利である。

昭慶律寺 驛西北方四軒 見物所要二十分

湖濱路を湖畔に沿ひ北行し領事館手前に出づれば直ぐ發見出来る。舊名菩提院といひ晋の高祖天福元年吳越王元瑾の建立に係り宋の太祖乾德二年の重建、大宗興國三年戒壇を築き同七年昭慶律寺の額を賜はつた寺で、明代和寇の亂には官命を以て焼かれたといふ歴史を有つて居る。現在の諸堂は清朝順治十七年の再建で格式規模の整備した律寺である。

日本領事館 驛西北方約四軒三 視察所要十分

昭慶律寺の西方、斷橋の北方寶石山の南麓にあたる小丘陵の高臺の地にあり、赤煉瓦の洋館上に旭日の國旗懸つて居る所がそれである。明治二十九年馬關條約で設置され、爾來四十餘年間この間十九代を経て現在二十代の道明領事代理に到つて居る。今次聖戰發生するや同館は一時閉鎖の已むなきに立到つたが事態恢復と共に逸早く來杭開館し膨張する在留邦人發展の爲めに日夜華々しい活動を續け居留民一般の信頼の的となつて居る。

保俶塔 (寶石塔) 驛西北方五軒二 見物所要三十分

日本領事館の西北、寶石山東端の臺にある。塔は最初吳の延爽の建立になり九層、次で宋代に重修して七層とした。民

國二十二年には又市政府により重建せられ今日に至つて居る。昔日の古雅な趣はないが美麗な灰白色の塔である附近は奇巖怪石に富み杭州市西湖を眼下に臨み遙か東方に錢塘江の流水を遠望する事が出来る。

斷橋殘雪 驛西方約五軒 湖濱碼頭より一、二軒見物所要五分

領事館の南方白沙堤の東端にある石橋を斷橋又は段家橋とも呼んで居る。清の康熙帝南巡の初春雪末峭の斷橋の風色は尤なるものとして西湖十景の一に列せらる。昔は橋も石段を以て造り、其の形は大太鼓に似て橋上に石門があつたが今は無く改修せられて美麗な石橋に瀟洒たる鋪裝道路が通じて居る。湖畔側に斷橋殘雪の御碑亭と美麗な浙江導游局(案内所)がある。

平湖秋月 驛西方六軒 見物所要八分 湖濱碼頭より一、五軒

斷橋より白沙堤を西行して錦帶橋を渡れば孤山の東端に至る。此の南側にある一亭が即ち平湖秋月である。昔嘉澤廟があつて西湖の龍神を祀り別に龍王堂とも稱して居た。傳へるところによれば古は廟は蘇堤の第三橋の南にあり梁の大同年間の建立のものを宋の紹興年間に寶石山下に遷したため其の址に望湖亭を構え孤山の入口に移したといはる。

亭は三面湖水に接して全湖の景勝を納めて居る。清の聖祖南巡の時「平湖秋月」の四字を題して亭を舊址に建て石碑に記されたといふ。仲秋の名月を観るに最適といはれ西湖十景の一である。亭前に民國十八年建立の革命紀念塔がある。

平湖秋月亭に西隣した美麗な建物と莊園は哈園といひそれに隣接する建物は前の藝術專科學校である。

放鶴亭 驛西方六軒三 湖濱碼頭より二軒二 見物所要一五分

孤山の北部、巢居閣の東側にある。平湖秋月、中山公園及び西冷橋より通じ、裡湖畔より木橋によつて亭下に通じて居

る。裡湖東北部の美觀を一望に收むる所にある。亭は宋代の詩人と靖處士こと林逋の故廬の址でもと元人陳子安の建立になり林和靖が名鶴を飼育して居たのに因んで梅林放鶴の稱があつたが後廢れ、明の嘉靖年間錢塘令王鉞が重建して放鶴亭と曰つた。其の後民國四年と十八年に重修せられ今日に至つて居る。曾て清の聖祖來遊の砌、舞鶴賦一篇を賜書せられた事がある。巢居閣の上手に林和靖墓及鶴塚があり東方に林社がある。附近は和靖愛賞の梅樹多く開花の時季には觀梅客の往來が多い。

馬鞠香、馮小青墓 驛西方六軒三 湖濱碼頭より二軒三 見物所要五分

巢居閣の西方にあり、裡湖に面し朱塗りの四柱で出来た美麗な亭の内にある二個の墓がそれである。馬鞠香は宋代の婦人で詩作に秀で、生前林和靖の詩を愛賞して居たと傳へられる。馮小青は明代武林の馮氏の第二夫人で美人にして詩才があつたが本妻は之を嫉視して孤山の梅嶼の別墅に幽居したので彼女は日夜悶々として樂しからず十八歳を一期として早逝したと傳へられる。西湖佳話の梅嶼恨蹟中のヒロインである。

蘇曼殊墓 驛西方六軒八、湖濱碼頭より三軒七 見物所要五分

中山公園の裏面にあたり。西冷橋及び放鶴亭より行く事が出来る。墓は裡湖及び西冷橋に面した物靜かな雜木林の中に横はつて居る。

曼殊は姓は蘇原、名を元瑛と言ひ、我が東京に生れ、父は廣東省香山縣の人といはる、五歳の時親に隨ひ歸國し十七歳にして廣州の長壽寺に入り僧となつた。法名を曼殊といひ世人は曼殊上人といふ。

其の後、江蘇、浙江、南嶽、河南等の諸地を放浪、遠く日本、シャム、印度、錫蘭等の諸國を遍歴し、歸つて上海に長

く寄寓して柳亞子、章子釗等の南社同人と交遊して居た。性來非凡で梵文、英文及法文に精通し又繪畫を好くし夙に一家を爲し、小詩を作れば浪漫文學者として一流に推されるの才を持つて居た。曾て西湖に遊び二十歳の時には靈隱山に入り教典の著作をなしたりして居たが民國七年三十五歳を一期として上海に於て病歿した。汪兆銘其の他生前の交遊の士が資金して墓所を孤山の地に求め一塔を建て、死後を弔つたといふ。附近は公園の裏面で餘り静寂に過ぎるが、散歩によく西冷橋の東側は夏季は蓮の繁茂するところで開花時は美觀を呈する。

浙江忠烈祠 驛西方六軒二 湖濱碼頭より一軒八 見物所要一〇分

孤山の南麓、平湖秋月より西五百米突にして達す。昔は清の行宮で康熙四十四年南巡の折使用、雍正五年に聖園寺と改められ民國元年忠烈祠を建立、辛亥革命浙軍攻撃陣之者は寺後に祀り南京陣亡將士の祠を後に改めて浙江忠烈祠と名附けた。祠前に記念碑がある現在西湖博物館に編入せられて居る。

西湖博物館 同前

浙江忠烈祠と中山公園の間に介在する。民國十八年西湖博覽會閉會後博物館内に一部分の動植物、礦物の標本及び中國歴史上文化上の記念物品を保管陳列し公衆の觀覽に供して居る。今次事變の混亂に紛れ内部は不睦紛雜して居たが、内地の文化學者等の手により整備せられ舊態に復するに至つた。

中山公園 驛西方六軒二（見物所要二〇分）湖濱碼頭より一軒八 バスの便あり。

公園は孤山の南方の中央地區に當る。昔は清の行宮の址で園内には花樹多く幾多の風亭、池水あり禽鳥の囀りを恣にし、閑雅に富んで居る、公園の高臺は孤山の最高地で西湖の全貌を一眸に收める事が出来る。尙園内には有名な文瀾閣があ

る。

文瀾閣 驛西方六軒三 見物所要二〇分 湖濱碼頭より一軒八

中山公園の一部を占め、清の高宗南巡の砌、行宮となつた所の一部分で、昔は四庫全書を保藏してゐたが咸豐の兵亂に燒け、光緒六年浙撫譚文勳公鐘麟の重建するところとなる、近年兵火に燒けた書籍を補寫して舊態に復するに至つた。現在浙江圖書館孤山分館となつて居る。閣の建物は至極雄麗にして學者文士の必ず訪問する所であるが平素は門を閉ぢて一般の入場を許さない。

清風草廬故址 驛の西方六軒四 湖濱碼頭より一軒九 見物所要一五分

中山公園に西接して居る。元來、清の徐潮の別邸であつたが、潮氏の歿後は家祠に改造したので市民は徐天官祠堂と呼んで居た。其の後久しく補修せず放置せられたのを前の國民政府某要人に移讓し、同要人は宮殿式の巨樓を造營し之を政府に寄贈した。工事完了後は専ら、文獻の陳列とか外賓の接待等に使用して居た。其の美麗な建築は孤山の一名物で、西湖に臨む一大宮殿を彷彿せしめる。

西冷印社 驛西方六軒八 湖濱碼頭より二軒三 見物所要三〇分

清風草廬故址の西方、大和園と呼ぶ支那料理店に西隣して居る。杭州に於ける篆刻家の結社で、丁上佐、丁仁葉、銘吳隱、王壽祺等の創立にかゝはり、清派の印祖丁敬身を祀つて居る。内部は數奇をこらし仰賢亭があり、清の印人丁敬身の像の石嵌其の他數體あり、又山川雨露圖書室、寶印山房、文泉、印泉、小盤谷、懸盒、還璞精廬等の見るべきものあり、別に四照閣があり四面玲瓏全湖を望み何れも古趣に富んで居る。

西冷橋 驛西方七杆八 湖濱碼頭より二杆六 見物所要一五分

孤山西方、白堤の西端にあたる。昔は西湖の渡場として有名で附近は西陵、西林又は西村とも呼んで居たといふ。橋は民國三年改修し其の後西湖博覽會に瀟洒たるアスファルト舗装のものに改造せられた。橋傍に蘇小小墓がある。

蘇小小は南齊の人、錢塘の名妓として其の名一世を風靡した人である。附近西方に滑鄭貞女墓。秋瑾墓及び風雨亭がある。女俠秋瑾は清末革命の同志の一人で逮はれて紹興城外で斬罪にあつた烈婦である。

鳳林寺 驛西方七杆三 湖濱碼頭より二杆七 見物所要一五分

西冷橋の西方二百米突許り葛嶺の西麓にあたる。俗に喜鵲寺と呼ばれ、唐代刺史斐常棟の建立、開山は牛頭宗の道林禪師（烏窠禪師）である。禪師は名を圓修と言ひ此所に四十餘年間住居し、巨大な松樹の上に坐禪して居たといふ。曾て白樂天が杭州の守たりし時屢々往來した事あり、禪師との問答は有名になつて居る。寺は明代に重建し名を鳳林と賜はり以後鳳林寺と呼ぶに至つた。

岳王廟 驛西方七杆三 湖濱碼頭より二杆九 見物所要二五分バスの便あり。

鳳林寺の西方、棲霞嶺の南麓に當り岳湖に面してゐる。有名な南宋の忠臣岳飛（宋少保岳忠武穆王飛）を祀つた廟で、忠烈廟とも稱して居る。廟は清代に城内より一部分移轉し民國八年重修し最近亦之が補修を行つた。規模宏壯、湖畔諸堂祠中屈指のものである。廟は大別して正殿、後殿及び岳墳に分れ、正殿は正門に相對し岳飛の像あり、正殿左右に烈女侯祠及び輔文侯祠がある。後殿は正殿に西隣し岳墳に北接し啓忠祠、五侯祠、五夫人祠、精忠閣及び際寶殿等あり、啓忠祠に於て岳飛兩親及子息の諸像を祀る。廟の西南隅に岳墳がある、精忠柏亭の側の垣門を通り中庭に入れば忠池、忠泉と名づく

小池及び井戸があり、更に進んで石門を入れば即ち精忠墓に到る、俗に岳墳と云ふ。正面に岳王墳右側に其の子雲の墳があり、兩側には石人、石獸の立像がある。又、岳墳の入口左右に面轉して跪坐して居る鐵像四體は何れも惡人で、右が秦檜夫妻、左が萬俟卨・張俊の像でコンクリートの柵を以て圍まれて居る。中庭の南北兩側の石壁には古今有名人の碑石がある。精忠柏亭は岳飛受刑の日柏樹枯死して化石したもので、岳飛の赤心を傳へるものとして集められたものである。廟内諸堂及び石刻に盡忠報國の雄渾な太字が目につく。

葛嶺 驛西方約六杆 登山所要三五分

葛嶺は寶石山の西方約六〇〇米突、棲霞嶺の東方略々同じ距離にあり、北裡湖北岸に迫る諸峰中の最高の嶺で別に葛塲とも呼んで居る。曾て晉の道師葛洪を葬つたと傳へられる。登山口は寶石山麓、南麓及び棲霞嶺の三ヶ所があるが其の中南麓の瑪瑙寺附近より登るのが最良である。登山路は數石と石段で築かれて迂曲して居るが途中は眺望絶佳な所が多く亭閣の設備があり、登山者の休息と眺望に至便である。亭閣は民國四年吳縣の湯、趙二氏の相前後して建立したもので流丹閣、喜雨亭、頑石亭、賢燦亭、九朝亭及寶雲亭等がある。附近の樹間には葛仙庵がある。舊名瀟青道院といひ其の場所は宋代の賈仙道の半間堂の地所に近く新に重修せられて居る。嶺頂に近く煉丹臺があり頂上の平地に初陽臺がある。煉丹臺は晉の葛洪が此所で藥を煉つた所と傳へられて居る。尙初陽臺は葛嶺の最高所に當り。南方に全湖の景色は眼下に映じ西南は諸峰蜿蜒として起伏常なく、北側は現在クリークや運河の通ずる城外の沃野を一眸に收め、東は即ち市内の雲煙に燃る萬家と錢江の水平線の眺眺を納める事が出来る。酷暑の候臺上に登れば涼風袂を拂ひ頗る爽涼、又陰曆の十月朔日には日出を觀るのに最適といはれる。

黃龍洞 驛西方七軒八 見物所要二五分

葛嶺の北麓にある。紫雲洞より東約半軒、日本領事館前より北行し迂廻して行けば約三軒計り寶雲山下に靜姿を横たへて居る。宋の淳祐年間僧の慧開此所に錫を留めて居たといふ。境内には道教諸殿の外に清池があり、西方の高所より石濠の龍口より流下し日夜飛瀑の音を聞く。傳説に依れば曾て黃龍が出現したといふので名付けられた。洞は池の上手にあり、正洞及び小洞多數よりなつて居る。正洞は池に近く内部の形状圓型で、黃大仙洞と稱し黃石公の像を安置してある。正洞より東方上手に進めば人工になる幾多の諸洞があり通路曲折して登る。途中大佛の中像の安置されて居るを見る。東方上手に登れば新殿がある。殿内には道教の始祖像を祀る。總てに靜寂結構、落付いた所で一訪に値する。

紫雲洞 葛嶺、黃龍洞より約半軒 岳王廟より約一軒 見物所要二五分

棲霞嶺東中腹にある。東は黃龍洞より、南は葛嶺より、西は岳王廟附近より達する。葛嶺と棲霞嶺との中間盆地は雜木鬱蒼として居るところに黄色と藍色を以て鮮明に塗られた土壁の中にさゝやかな寺宇妙智寺がある。妙智寺境内より東へ數百歩孟宋の竹林の石段を登れば紫雲古洞の勝景に到る。傍に法雲寺あり、荒廢して一種の凄絶を呈して居る。寺庭より棲霞嶺の岩窟に入れば即ち紫雲洞である。洞口より石段を降る事數十階、地底に降りて、數百萬斤の岩石懸垂する内を奥に進めば石段あり之を登つて十數歩、忽然として光明の世界に出る。正面岩壁に靈根淨土の石刻の下に觀世音菩薩、阿彌陀佛及び大勢菩薩の等身大の石刻がある。石刻の左傍の岩底に清水を湛えた泉水がある。夏猶寒く晝猶暗き若蒸した古窟で、蝙蝠の棲息數知れず附近七洞窟中最奇とせられて居るものである。夏猶寒く晝猶暗き若蒸した古窟猶附近は洞窟の奇勝多く有名であるが紫雲洞の西方、妙智寺内に棲霞洞あり、香山寺内に香山洞あり、又東北方の竹林

内に金鼓洞、蝙蝠洞、及び黃龍洞等其の他大小數個を窺ふ事が出来る。

清蓮禪寺(玉泉寺) 驛西方八軒九 見物所要二〇分

岳王廟の西北方仙姑山の北青芝塢口にある。南齊の建元年間僧の雲超の開山で淨空禪院と言つた、清の乾隆三十八年聖祖行幸せられ御詩と、御書金剛經の一部及大土像一體を賜はり名を清蓮と改めらる。寺内は仁王殿、大雄寶殿、羅漢殿等に分れ魚樂園、玉泉、細雨泉等がある。何れも寺の西隅にあり、魚樂園は方形周圍三丈餘の池で、清澄で池底の砂石も見え、池中に小さな石塔があり、池には五色の大小魚數百尾、昔は最大三四尺のものあり、頗る偉觀を呈して居た。池傍に洗心亭がある。清の李衛の建立といふ。又乾隆の御碑亭もある。玉泉は魚樂園の北隣にあり。源を西方の山に發し地下を流れる事數十里許、此所に到つて始めて湧出して居るといはれる。細雨泉は寺内にあり泉上に晴雨軒がある。寺前に市政府のプールがあり夏季市民の游泳盛んである。

雙峰掃雲亭 驛西方九軒三 見物所要三分

岳王廟の西方約一軒半、廣坦な九里松にある。同所は西方、南北兩高峰の中間に位し、兩峰の間に流雲の漂ふ美觀を恣にし得る爲め、清の康熙帝は西湖十景の一とせられた。亭には今も御碑を留めて居る。

飛來峰 驛西方一一軒五 見物所要二五分 バスの便あり

靈隱天竺兩山の中間に位し雲林寺に近く別に靈鷲と名付く。岳王廟より六支里、茅家埠より約三支里。晉僧慧理大師曾て此の山に登り「此れ印度の靈鷲山の小嶺にして何時飛來したるや」と歎せしめ遂に錫を留め、靈隱寺を建立せるに至つたといふ。飛來峰と號し南より北に延びるに従ひ高く最高數十丈で其の間奇巖怪石林立して、千態萬狀を呈し雜木繁し

て一種の神秘境を彫刻たらしめる。峰は石灰質の岩石にて成り其の南端には鐘乳の石洞數ヶ所あり、古代の佛刻、佛像多く、斯界の偉觀とせらる。洞窟は北より龍潭洞、玉乳洞、青林洞、其の他あり、玉乳洞及び青林洞は、理公塔前より西行すれば至る。理公塔は宋代の開寶八年の創建、明代萬曆十五年重修したるもので、玉乳洞内には風貌人間的で、衣摺の粗野な十六羅漢石像あり、南端の高崖の華嚴會曼荼羅の相は宋代乾興年間胡承德の手になり、「盧舍那佛會一十七身」とす、玉乳洞より西に通ずる青林洞には亦宋代胡承德の下生彌勒尊佛の小像あり、隣接して盧舍那佛三尊は元代至元十九年徐僧録の鑄造なるものである。龍潭洞の洞口外壁には立佛觀音、三尊、白馬負經、布袋和尚等の良刻多く、洞中には塗金した觀音像がある、洞を東北に出れば左手に一錢天があり巖孔より中空を窺ふ可く、之より雲林寺に到る間の岩石には幾多の佛像の石刻がある。此の中布袋石像多聞天王大像は元の至元廿九年揚謹の手になるものである。雲林寺仁王門前方飛來峰中腹に翠微亭があり、峰の東南に慈雲宮がある。序に飛來峰造像の起源を辿れば、後晉の天福四年（九三九年）道淵、觀世音像を刻したのに始まり、その後十四年にして後周廣順三年彌陀、彌勒、勢至等の造像、更に五十年にして宋代咸平三年（一〇〇〇年）羅漢像、其の後二十年にして舍那十七體下生彌勒觀音等の造像、その四年後に太祖六祖像、降つて一八〇年を経て天尊、羅漢像あり、約八十年を経て元代至元十九年（一二八二年）舍那三尊、彌陀三尊及び觀音、揚蓮眞伽の造像あり、引續き釋迦像、金剛菩薩、多聞天が造られ、其後七十一年を経て十佛觀音の造像があつた、晉代より元代に至る約一千年間に約三千體の造像をみたといふ。宋刻は唐代の經緯と言ひ得るが元刻は頗る變化し喇嘛教の色彩を帯び、支那彫刻史上貴重なる資料として一見に値するものである。

雲林寺（靈隱寺） 驛より一・一軒六 見物所要四〇分

飛來峰の東北方、靈隱山の南麓にあり。晉の咸和元年僧慧理此所に結庵し經文の翻譯に従事したのが最初である。宋代禪宗天下五山の第二位たりし事あり、元明時代は一興一廢があつた。清の順治年間、僧の宏禮が重建した。寺内に覺皇殿直指堂、羅漢殿、金光殿の藏殿、大樹堂、南鑑堂、聯燈閣、華嚴閣、清蓮閣、梵香閣、玉樹林、法華堂、萬竹樓等がある。康熙二十八年勅定により雲林寺と改む。其の後八年間に聖祖行幸せらるゝ事數次金佛、香金及び御書の經卷等竝に御詩を賜はつた。雍正八年李衛大雄殿、天王殿等を重修し、乾隆十六年乾隆には覺泉殿を鸞嶺龍宮、直指堂を滴翠披雲と題名せらる。咸豐辛酉に大殿を燒き、民國元年主僧、巨材を海外より購入して殿閣を重建した。大雄寶殿の左手に羅漢堂を造り内部に羅漢五百體を安置してゐたが民國二十五年燒失した。

仁王殿を入り右手に客殿及び觀音堂があつたが、昨年夏不幸にも失火で燒けて終つた。敷石の中庭の兩側の古塔は五代の作、惟鐘は明代の作、寺前の石塔は共に清代の作である。蓋し同寺は規模に於て市内諸寺中の第一といふべく、天竺と共に參詣者頗る多いのは又宜なる哉である。

光 雲林寺より一・五軒 步行三五分 見物所要一五分

北高峯の南側中腹にある。雲林寺境内及北高峯より行く事が出来る。同所には庵があり名付けて韶光庵といふ。吳越王の建立になり昔は廣殿といふ額があつた。唐代に一詩僧が院の西側に庵を結び自ら韶光と號したといふ。白樂天曾て杭州の守たりし時其堂に法安と題名したといふ。宋の大中符年間、今日の額に改めた。庵は懸崖に造られ中空に突出して奇勝を呈し遠く錢塘の江水を臨み韶光觀海の稱がある。庵内に金蓮池あり庵の上手に煉丹臺及び丹崖石臺がある。

下天竺（法鏡寺） 驛西方一二軒二 見物所要二〇分

雲林寺山門の南方約六〇〇米突、飛來峰の西約五〇〇米、細流の音を聞く山間の小平地にある。晉僧慧理の創建になり、最初福經院と呼び。以後屢々興廢があり、清の康熙三十八年聖祖南巡の節行幸せられ賜金して重建し、乾隆二十七年高宗は法鏡寺の額を賜はつたが咸豐年間兵亂に焼け、光緒八年重建した。寺内には金佛洞、三生石、蓮花泉等がある。

中天竺 (法淨寺) 驛西方一二軒八 見物所要時間二〇分

下天竺の南西方約八〇〇米天喜山の北麓にあり。永青塢と相對して居る。隋の開皇十七年僧の寶掌西域より來杭入定して道場を建立したのに始まる。清の康熙三十八年聖祖賜金せられて重修同四十二年「靈竺慈緣」の題字を賜はり、乾隆三十年高宗南巡の際、法淨寺の額を賜はつたが、咸豐年間毀け同治年間復舊した。古寺で毎年彼岸の節句には參詣者が多い。

上天竺 (法喜寺) 驛西方約一三軒七 見物所要時間二五分

中天竺の南西方約九〇〇米白雲峰の北麓にあり北方天喜山と相對して居る。周圍は三方高峰に圍繞せられた靜寂な聖地である。寺は昔、吳越の武懿王が白衣の人が其の住居を興えられん事を乞ふ夢をみたので路を開いて開基したといふ。これが即ち地剎盧で、號して天竺看經院といつた。其の後現在の場所に移轉したといふ。宋の孝宗は院を改めて寺となし清の乾隆十六年高宗南巡の節には行幸せらるゝ事四回、携額して法善寺といつた又後殿に寶院飛觀の額を賜はつたが咸豐年間焼けて終つた。次いで同治の初布政使將益禮大殿を重建し、光緒年間江蘇藩臺(官名) 聶緝璽巨萬を募り補造して今日に到つた。燃香參詣者の多い事は杭州第一で寺宇宏麗なる事三天竺中の冠たるものである。

曲院風荷 驛西方七軒五 湖濱碼頭より二軒七 見物所要時間五分

岳王廟の西南方、九里松洪春橋の南に當る。曾て宋代鮑院(釀造殿)があつて金河洞の水で麴を造り官酒を釀造して居たが、其の地は元來蓮花(荷花)が多く鮑院荷風といつて居た。清の康熙三十八年に跨虹橋の北寄りの殊に蓮花の多い場所には亭を造り、蓮花の觀賞をして居た。清聖祖は鮑院を曲院に改め荷風を風荷とし亭内に碑石を置かれたといふ。西湖十景の一となつて居る。

蘇堤春曉 驛西方約八軒一 湖濱碼頭より二軒七 見物所要時間一五分

蘇堤は南山、淨慈寺西方より北山の杏花村に至る約二軒六の湖中に延びた長堤である。堤は宋の元祐年間蘇軾(東坡)湖を濬して堤を築き、六橋を配し桃柳を植えて風趣を備えた、後郡守の林希榜なる者堤を蘇公堤と呼ぶに至つた。降つて清の康熙三十八年聖祖南巡の節蘇堤春曉と題し、西湖十景の第一位に列せられ望小橋の南に亭を建て、碑を置かれた。雍正二年世宗は諭して西湖を濬され堤岸を増築し桃柳を補植せられ、同八年總督李衛又亭の後方に曝露亭を建立した。水溫む頃となれば堤上の楊柳、桃花は霞に包まれ、映光瀟として居る景致は一幅の南畫である。近年市政府工務局の手により堤岸は修築せられ、楊柳花木の類も悉く手入れせられ、且つ道路もアスファルトの舗装道路となり、船遊に散步に將又ドライブに江南の春を滿喫する事が出来る。(註、六橋とは南より、映波、鎖瀾、望山、壓堤、東浦、跨虹の六橋をいふ。)

花港觀魚 驛西南方一〇軒 見物所要時間七分 湖濱碼頭より三軒二 淨慈寺より一軒

花港とは蘇堤の南部映波橋と鎖瀾橋との中間で、西湖に面した定發橋附近一帯を呼び、遙か西方の花家山より水が流れて注いで居るので其の稱があるといふ。附近には昔盧園があつたが宋の内侍盧元界の別墅で方形の池に湖水を導き數十種

の魚を飼養して見物客が頗る多く春先の好散策には絶好の場所として有名で花港觀魚の稱があつた。清の聖祖南巡の時「花港觀魚」の四題字を賜はり、西湖十景の一とさる。今亭内には亭と碑を留めて居る。

附近に宏麗な別墅蔣莊があり、南湖の全景を恣にして居る。

法相寺 鄞西南方約八杆二 見物所要時間二五分

法相寺は南高峰、三峯山及び大兎兒山の中間盆地にあり、杭富街道より北西に入り高麗寺を経て西折すれば即ち到着出来る。

寺は宋の治平年間僧の道定來杭して開山したもので舊名長耳相といふ以後今日の名に改めた。咸豐年間燬け、後重建した。僧法眞のミイラ(木乃伊)が安置してある。法眞は長さ九寸の耳を有して長耳和尚と號し、別に光佛ともいつた。參詣の婦人はミイラの腹部を撫でると素晴らしい男子を産むといはれ參詣者頗る多い。寺の側に禱亭があり亭前に千年樟がある。

石屋寺 (大仁寺) 鄞西南方八杆七 見物所要時間二五分

杭富街道の一驛四眼井亭より、西北に約七〇〇米進めば到着する。南高峰の東南麓、青龍山の西麓に當る盆地に位置して居る。寺は宋代の建立にかゝはると言ふも詳かならず、清の咸豐年間燬け、後重建せられ今日に至つて居る。寺内に彌彌佛一體あり、重量六〇〇斤許り宋代の鑄造と傳へられる。境内に石屋洞がある。

石屋洞は洞口の高さ約八米許り、洞壁に多數の佛像羅漢像の石刻がある。(洞壁の中央に釋迦の坐像、二羅漢、二菩薩、二力士を脇侍として左右に二體あり、右下方に布袋の石像を加えた三尊と其の他悉く羅漢のみ數百體を數ふ)。惜しい哉之

等の諸石像の頭部は、洪揚の役の時悉く破壊せられ、其の後補修し釋迦佛は金色に其の他は總て赭添されて居る。寺前に近年建立の鈴の石塔がある。

水簾洞 鄞西方約九杆六 見物所要時間二〇分

石屋寺より西方約一杆、南高峰の南麓にある。洞は鐘乳の石窟で洞口直徑約二米突清潔にして、新鮮な水が滾々として洞外に流出し恰も奏樂の音に酷似して居るので名付けたといふ、洞内に入れば左右の洞壁に羅漢、菩薩の像數體あり、更に進めば乳白の石板突出して之を叩けば太鼓の音の如く「石鼓」と呼ばれて居る。

流汗の酷暑都塵を避けて木犀の香粉々たる水簾洞の秘境を探れば何人も一日を清遊する事が出来るであらう。

煙霞洞 水簾洞上手約五〇〇米 鄞西南方約一〇杆一 見物所要時間一五分

翁家山の東側中腹にあり。水簾洞より石徑を登つて迂曲すれば雜林の間に奇勝を發見する事が出来る。晉代の僧彌洪が曾て附近に庵を結んで居て、此の洞窟を發見したが既に洞中に羅漢の石像六體があつたといふ。其の後五代の越王十二體を補刻して十八體となり以後大佛彌勒、觀音等の諸像を内部に補刻したといふ。洞口は高さ約四米許り、諸像は左右兩側にあり奥内に入るに従つて狹隘となり遂に終つて居る。洞内は夏季中頗る清涼で訪者が多い。

洞傍に石甍があり財神像の舊蹟がある。又清の光緒年間石刻の東坡像があり。洞口に千官塔、洞外に一碑あり、其の他見るべきものが多い。

龍井寺 鄞西南方一一杆六 見物所要時間二五分

翁家山の西北麓、鳳窠嶺東麓にある。同所には東は翁家山、北東は茅家埠より通じて居る。同寺は昔、壽聖院と稱し龍

井村より一支里許り離れて居たが、明の正統年間龍井の附近に移轉したので其の後は龍井の名を用ひるやうになつた。曾て清の高宗臨幸せられ「不著一相」の額を賜はつたが、咸豐年間燬けたので寺僧募金して重建した。附近は有名な茶の産地で龍井水は又清水として名高く遊客の訪れるもの頗る多いといはれる。

定慧禪寺 (虎跑寺)

驛の西南方九軒二 見物所要時間三五分

寺は貴人峰の東側中腹にあり、東南の大慈山、虎跑山に對面して居る。杭富街道を南へ進めば右手に堂々たる額を掲げた寺門があり、それより北行して約六〇〇米進めば溪水滾々と流れ雜樹鬱蒼たる中に堂々結構悠大な寺がある。即ち是である。

寺は唐の元和十四年僧欽山の建立に係り始め廣福院と稱し、其の後大慈寺と改稱した。當時僧の實中此所に居て水無きに苦んで居たが、夢中に「南嶽に童子泉があるが二虎を遣して移轉せしむる故憂ふる勿れ」と神の告を得、其の翌日果して二匹の虎が地を堀り、穴を作つたところ泉水が湧出して來て以後虎跑寺と呼んだと傳へられる。唐の乾符年間勅旨により「定慧」の二字を加へられたが其の後興廢があつた。清の聖祖は曾て南巡の折二回も臨幸せられ金剛を下賜された。其の後咸豐辛酉に燬け光緒十五年重建した。寺内に滴翠軒あり景勝絶佳。寺右に湖隱禪院がある。又寺内で湧出する泉水は清冽にして甘く、龍井、玉泉の水に勝るとも劣らぬものといはれ古來、龍井の茶と虎跑の水は中國茶人の諺となり其の名内外迄も傳はつて居る。

六和塔 (六合塔)

驛の西南方一一軒 開口驛の西方一、五五軒 見物所要時間三五分

月輪山の南麓、錢塘鐵橋の西六〇〇米許り、錢塘江及南岸一帶の景色を一望に收むる勝地にある。塔は宋の開寶三年知

覺禪師延壽始めて、吳越王の南果園に山を拓いて一塔を建立し寺を建て、錢塘江の水を鎖めんとした。塔は九層で高さ五十餘丈内部に舍利を藏して居たが後燬けて終つた。次いで紹興十二年重建、同二十六年僧の智曇舊址により之を完成したが、凡て七層であつたが内部は登降が出来たものであつた。其の後元明以來は屢々燒け再度重建せられた。清の雍正十三年帑金を下賜せられ重建、乾隆十六年高宗南巡せられ塔面に建塔記を認められ且七層各階に御書の扁額を掲げられた。即ち初地堅固、二諦俱融、三明淨域、四天寶網、五雲扶蓋、六龍負戴、七寶莊嚴の諸額を掲ぐ、別に各階に佛像觀音像等の諸像も安置せられ登降可能である。塔の外部は木造の十三階大樓で錢塘江岸の一偉觀を呈して居る。塔の西側に開化禪寺あり東方約六〇〇米の地に錢塘の鐵橋があり、又西方約八〇〇米突の地に之江文理大學がある。

開化禪寺 (六和塔院)

見物所要五分

寺は六和塔の塔院で舊名、壽寧院と呼び宋代の僧、延壽の建立になり、後燬け僧の知雲重建し名を開化教寺と改めたが歳久しくして再度災害に逢つた。其の後清の雍正十三年重建し、乾隆十六年には「淨空江天」の四字額を賜り其の後光緒年間僧の朱智募金し補修し今日に至る。別に月輪寺又は六和寺とも言ふ。

之江大學

六和塔の西約八〇〇米。見物所要四五分

大學は六和塔西方秦皇山上にあり。米人經營のもので清の道光二十五年(西紀一八四五年)密波に於て創設、一八六七年杭州城内に移し、擴充して、一九一〇年同所に移されたもので、現在は浙江文理學院と呼ばれて居る。同所は後に山を負ひ錢塘江に臨み、南岸の平野を一望に收め空氣清澄加之建物の結構又宏麗で内外有名な學園といはれる。

五皇山

淨慈寺南方約三軒 見物所要時間九〇分

山は杭富街道の東方にあり、東は將臺山、北は九曜山、南は大慈山等の諸山に繞らされた高峰で登山口は北部、清波門外より望仙亭、慈雲宮を経て登るものと西部、四眼井亭村附近、南部開口より央福亭を経て登る三箇所がある。山は別に育玉山とも稱し、山頂には道教の福星觀(玉皇山宮)其の他あり、中腹に七星缸、飛龍洞及慈雲宮等があり何れも山上の勝地を占め江湖の景勝を賞するに足る。尙山徑は敷石と石段によつて造られ輻輳の使用も出来、四季何れの時訪る、も快適一訪に値する勝地である。

淨慈禪寺 驛西南方五軒六 見物所要時間三〇分

寺は南屏山の南麓にあり外湖に南面して居る。後周の代錢王安俶の建立になり慧日永明院と號し永明禪師住して居た。宋代に改めて肅寧禪院とし禪宗五山の第一に推され、後改めて淨慈報恩光孝禪寺とした。明代に二回燬けて重建した。清代康熙三十八年清聖祖南巡の時行幸せられ淨慈寺及西峯の二書を賜はり帑金を賜はり重修せしめらる。其の後清末に燬け徐々に修復を策しつゝあり、昨年は大殿の重建なり、略ぼ偉容を整えるに至つたが舊昔の比ではない。大殿の後方に羅漢殿其の他殿前に雙井がある。新築の濟公殿は聖僧濟顛を祀り殿前には「運木古井」があり曾て淨慈寺が烏有に歸し重建の折、梁木が不足したので、聖僧が法力を以て古井より梁木を得たと言ふ傳説が残され、今猶井内には一木を存して居る。寺前に南屏晚鐘亭及鐘御碑亭があり寺の西南隅に防空避難所がある。

南屏晚鐘亭

清康熙三十八年聖祖南巡の砌、南屏晚鐘を西湖十景の一とせられ奇前に御題の石碑が置いてある。惟ふに淨慈寺後方の南屏山には蓮花洞。石佛洞及幽居洞とか其の他大小の洞窟多く、晚鐘一度夕べの動行を傳ふれば湖畔の諸峯之に應へ、餘

韻條々として盡きず佛恩の神秘を何人の腦裡にも傳へたといはれる。

防空避難所

淨慈寺後方、南屏山の中腹にある。同所は駐杭第八十八師の手により前の上海事變以後秘かに工事着手せられたもので經費二十五萬元を要したものとはいはれ、岩窟を巧に抜いて二箇所の通門を設け最新式の装置を施したものである。即ち、二ヶ所の通行口は頑丈なる鐵扉を備え、内部は通風温浸、電氣、電話、水道、洗面所、食堂、集會所等の施設完備し、室は大別して三箇に分れ、各部は大小各々十數室より成り、各室は長い通路に面して出入自由、恰も近代式アパートの内部を視る感があり一見に値する。

雷峰塔遺址

雷峰は淨慈寺の北方外湖に面した小丘陵をいふ。昔、雷氏此所に居を構えて居たので名付けたといふ。別に中峰又は回とも稱して居る。曾て越王々妃、黃氏此所に塔を建立し、雷峰塔と名付けたが別に黃妃塔とも呼んで居た。塔は最初十三級、高さ三千尺を至當としたのであるが、僅に五級を完成したに過ぎなかつた。其の後燬け、孤影寂然として殘存して居た。夕陽遙かに西山に没する頃ほひ眞紅の陽光之を照せば塔影中空に浮び、美觀を呈したので雷峰夕照の稱があつた。惜しい哉民國十三年の秋、一大雷響と共に倒壊して終つた。壞址から多數の經卷を發見したが俗に雷峰塔藏經と呼ばれて居る。此の塔經の所有者は古今の珍品として、保藏して居るといふ。近年市中で販賣して居るものは偽製品といはれるが眞偽何れも不明である。

錢王祠 驛西方三軒四 湖濱碼頭より一軒二 見物所要時間七分

湧金門の南方約一軒、外湖に面した湖畔にある。祠は越王錢鏐を祀り、昔は表忠觀とも稱した。清の聖祖會て「保障江山」の額を掲げ雍正年間總督李衛重建した。其の後歳久しく補修せず祠宇も荒廢して居たが、民國十五年總督盧、孫兩大殿を修建し祠宇面目を一新するに至つた。祠内には會て蘇東坡の書いたといふ表忠觀の碑文があつたが壞れ、後人之を模刻した。祠前には方形の池及功德坊があり、湖水に近く船遊も可能である。

柳浪聞鶯

錢王祠の北方にあり。同所は昔柳州と呼ばれ柳樹も鬱蒼として亭子灣に近接し、黃鸝鶯鳥の音啼く畫舫笙歌の音忙がしく一大遊園地であつたといふ。清康熙三十八年、聖祖は柳浪聞鶯と題した御碑を建立せられ西湖十景の一とせられた。今は其の面目既に無く、柳樹枯れ荒廢した草地に唯一基の石碑のみ残り寂然たる光景を呈して居る。

吳山 (城隍山)

見物所要時間二時間

城内の南西隅にある周圍四軒餘、約六〇米突許りの岩山で紫陽山、雲居山等の小丘陵を合して吳山と呼んで居る。又昔、吳人憫子胥が諫死したのを後人彼の爲めに祠を山上に設けたので胥山ともいひ、別に山上に城隍廟があるので城隍山とも呼んで居る。會て明の太祖が「提兵百萬西湖上、立馬吳山第一峰」と詩を賦したのは此の山で諸堂宇の觀る可きものあり、市内は勿論江湖の遠望を恣にして餘す所なく、來杭者は是非一訪すべき景勝の地である。浙江省城隍廟は山頂の中央を占め南北一支里位の地域内には堂宇相隣接して、若東嶽、太歲、藥王、關帝、白衣、市府城隍、魯班、火神等の諸廟、雷祖、財神、聖帝等の諸殿あり、府城隍廟の左に倉聖祠、趙公祠(清の趙恭、毅公、申喬を祀る)阮公祠清の阮文達公元を祀る)王壯愍公祠(清の浙江省鎮撫使王有齡を祀る)馬公祠、葛公祠等の諸祠大小數百の堂宇林立して餘地がない。陰曆の

正月には市民の登山參詣者頗る多く、香花の煙全山を埋め、狹隘な石疊の參詣路には觀相、手相、占卦、曲藝、小賣、小間物店等を開き全山雜踏を極め、一偉觀を呈する。

梵天寺

南星驛西方約一軒 見物所要時間一五分

寺は包山の東北麓にあり、吳越王の創建にかゝる。一名梵天講寺といふ。規模は左程大ではないが、寺門外の二大石塔は杭州隨一のものと言ふべく高さは約十一米突餘り、乾德三年の作で彫刻極めて鮮明で吳越文化を如實に物語るもので吳越王建造の石幢中最大のものとして一見に値するものである。

博覽會塔

湖濱より二軒遊艇所片道所要時間二五分 料金二角五分 見物所要時間一〇分

孤山の南方、中山公園正門に相對して居る。一見燈臺様の塔で、博覽會紀念塔とも呼んで居る。民國十八年西湖博覽會の時、此所に噴水器を築造せんとしたところ會期中に工事竣成を見ず徒に記念の爲め殘留するのみとなつた。全部鐵筋コンクリートで出來て頗る堅牢角形で、内部に鐵鐵螺旋狀梯子があり自由に欄によつて鏡の様な全湖を眺める事が出来る。

湖心亭

湖濱より二軒〇遊艇所要片道二五分 料金二角五分 見物所要時間一五分

西湖の中心にある。昔湖心寺及一塔があつたといふ。明代知府孫孟一亭を建立し初め振鷺亭と稱した。清聖祖は「靜觀萬類」と題せられ、其の後雍正年間重修し、歳久しく荒廢したが前の浙江鹽運使胡恩義寄金して亭を修葺面目更新した。亭は四面水に臨み楊柳の老樹幹を湖上に擡げ其の間に彩色の亭、隱顯して美しく湖心平望を恣にした名勝である。

小瀛洲

(三潭印月) 湖濱より二軒五遊艇片道所要時間二五分 料金三角 見物所要時間三五分

湖心亭の南方、蘇堤望山橋の東方に當る。洲は内部が一大蓮池となり周圍が堤で東西に蓮池を二分し、南北に石橋が曲

折して通じ老樹鬱蒼として茂り、禽鳥靜寂を破つて飛び交つて居る。洲の北岸に石坊あり、先賢祠、彭公祠を過ぎて石橋を渡り、南行すれば亭々亭、近翠軒、虛堂、關帝廟及卍字亭、三潭印月亭等がある。洲の南方湖中に三石塔がある。宋の蘇東坡が曾て湖を深くしようと欲し湖水を濬して標識を置き舟行を禁じ菱蓮の栽培を認めなかつたといふ。當時の三塔は壞れ明の萬歴年間三小石塔を置いて今日に至つた。三塔は正三角形に置かれ湖上に浮遊して居るものゝ如く觀え月明の節之を照せば影を湖面に落して美しく三潭印月の稱がある。清聖祖所題の三潭印月の碑と亭は近くの小瀛洲にある。事變前は蘇堤より電線を張り、夜間の艇遊にも便利で酷暑の納涼地として訪れる市民は頗る多かつた。湖中の名勝として西湖十景の一である。

- 西湖十景 一、蘇堤春曉 二、柳浪聞鶯 三、花港觀魚 四、曲院風荷 五、雙峰挿雲
六、雷峰西照 七、三潭印月 八、平湖秋月 九、南屏晚鐘 十、斷橋殘雪

中支都市案内

(ビュロー 發行)

上海	三五版 百餘頁	定價 三十錢
蘇州	口繪グラフィヤ版 三六版二十四頁	定價 十錢
南京	市街地圖添附 四六版十六頁	定價 十錢

昭和十四年八月 一日發行

定價 十五錢

編輯人 奉天市住吉町五番地 藤井 清
 發行人 奉天市住吉町五番地 西田 萬夫
 印刷人 奉天市大和區大和町 東亞印刷株式會社奉天支店
 山田 浩通

發行所 奉天市住吉町五番地 ジャパン・ツーリスト・ビュロー 滿洲支部



杭州案内圖

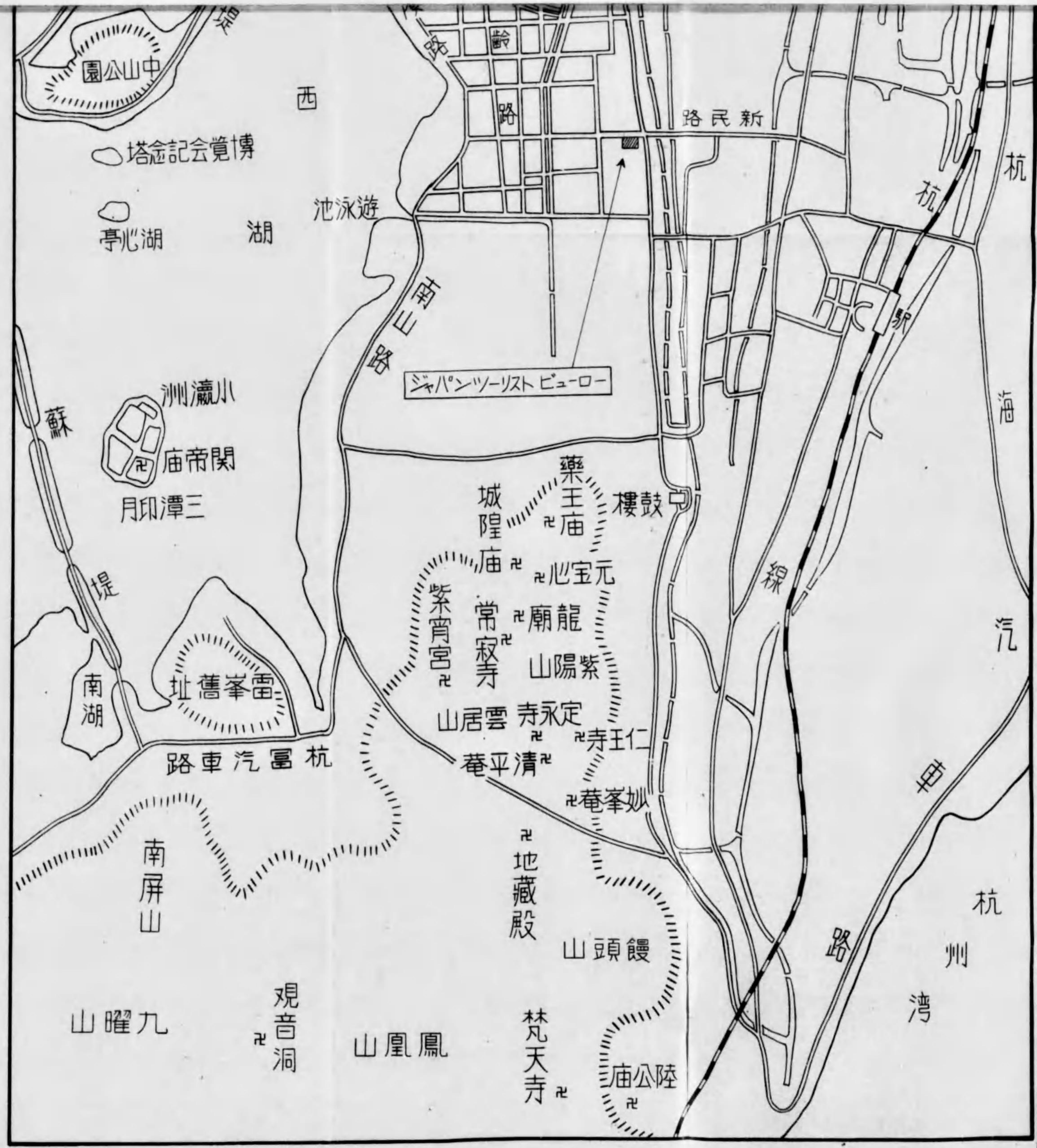


中支都市案内

上海 三版 百餘
 蘇州 口繪グラビヤ
 南京 三六版 二十四
 市街地圖 添附
 四六版 十六頁
 上質紙

瓊れ明の萬歴年間三小石塔を置
 之を照せば影を湖面に落して美
 前は蘇堤より電線を張り、夜間
 十景の一である。

西湖十景 一、蘇堤春曉
 六、雷峰西照



中支都市案内 (ビュロー発行)
 蘇州 三五版 百餘頁 定價 三十錢
 上海 口繪グラビヤ版 定價 十錢
 南京 市街地圖添附 定價 十錢
 北平 四六版十六頁 定價 十錢
 天津 七頁 定價 十錢

昭和十四年八月五日發行 定價 十五錢
 編輯人 奉天市住吉町五番地 藤井 清
 發行人 奉天市住吉町五番地 西田 萬夫
 印刷人 奉天市大和區大和町 東亞印刷株式會社奉天支店
 發行所 奉天市住吉町五番地 山田 浩
 ジャパンツーリストビュロー滿洲支店

蘇東坡が會て湖を深くしようと欲し湖水を濬して標識を置き舟行を禁じ菱蓮の栽培を認めなかつたといふ。當時の三塔は壞れ明の萬曆年間三小石塔を置いて今日に至つた。三塔は正三角形に置かれ湖上に浮遊して居るものゝ如く觀え月明の節之を照せば影を湖面に落して美しく三潭印月の稱がある。清聖祖所題の三潭印月の碑と亭は近くの小瀛洲にある。事變前は蘇堤より電線を張り、夜間の艇遊にも便利で酷暑の納涼地として訪れる市民は頗る多かつた。湖中の名勝として西湖十景の一である。

西湖十景
 一、蘇堤春曉 二、柳浪聞鶯 三、花港觀魚 四、曲院風荷 五、雙峰插雲
 六、雷峰西照 七、三潭印月 八、平湖秋月 九、南屏晚鐘 十、斷橋殘雪



亭雪殘橋斷



春の橋斷



莊蔣



終

